

安町の中学校へ美術教師として赴任されるのです。

叔父の送金で学生生活を送った画家は、一日も早く独立をする必要があったのだと思われ、教職課程や学科を熱心に学んだのもそのため、就職先を選ぶ余裕はなかったのです。

なぜなら、あれだけ剛直で師であった藤島教授にさえ絵を見せなかった先生が、一度だけバナナを手土産に就職係の教師の自宅を訪ねられるのです。頼みごとのため手土産を持参したのは、先生の生涯でこの時だけだったようです。

孤独な少年時代を送り、自分が必要な人間ではないと感じた画家にとって北海道への就職は漂泊者の想いさえ抱かせたのでしょうか。

型破りの人気教師

いよいよ倶知安での美術教師としての生活が始まるのです。

私は当時香月先生に学んだ生徒に北海道へ行って一人ひとりにインタビュをして歩きました。その中から、冬は目と口だけが出る防寒帽をかぶり全校朝礼にはいつも遅れて登校。吹きさらしの一本道



応召を直前にひかえて家族と記念撮影（写真は香月家より）

（昭和18年1月）

をグラランドに向って丸くなって走るユーモラスな姿を記憶している生徒は多く、また授業中剣道のコテを生徒にあてさせボクシング大会を開いたり、相撲をとらせたりする時は廊下の端に見張りを立たせて騒ぎ、よく生徒と一緒に校長室で叱られたといひます。

授業中はいつもポケットにコンペイ糖を入れており、気に入ると生徒の口にもホイと放りこんでくれたと当時の生徒は言っておられます。

また秋の工作時間には、生徒のだれよりも熱心に裸でスキーを制作し、これで今年の冬はスキーをやるんだと本気になって、子供のようでした。また美術学校を受験する生徒には随分きびしい指導をしたといわれます。

さらにユニークなことは、下宿屋の床の間の座敷で兎を飼う苦情がでて下宿屋を追いつたことと聞きます。

画家自身の北海道時代は制

作上の迷いからスランプだったと当時を回想するのですが、後に文展で特選になる「兎」のモチーフはすでに北海道時代にできていたのです。

寒い北海道の冬、孤兒的体験にも似た少年時代を過ごした画家が、暖かいふるさと山口と祖父に厳しく育てられた少年時代をなつかしげに生徒達に語り、工作室には「祖父の像」が掛けられていたと聞きます。

身寄りのない酷寒の北海道で、ふるさととそこにつながる人々の温かさをかみしめた北海道時代の先生に、シベリヤの「原体験」をみるのは私ひとりではないと思います。

そして結婚

昭和十二年十二月北海道を離れ、翌年一月に山口県下関高等女学校の教諭になられた先生は、講堂で女生徒達に紹介されました。「倶知安中学校から来られた前途有望な絵かきさん」と校長に紹介されると壇上では、もともとてれやの性格の先生は顔を赤らめ天井ばかりながめていたそうです。

ハンサムで独身だった先生は、女生徒達の憧れの的であったようです。戦時体制が強ま

る中での先生の授業はユニークで女生徒達は、図工そのものよりも先生の授業を楽しみにしていたようです。

そうした中で同年三月、當時下関高等女学校を卒業して幼稚園の保育をしていた奥様（婦美子さん）と見合いをし、六月に結婚されたのです。

「憧れの先生が結婚される。それも関女の藤家さん」ということで女学生達は、羨望のまなざしでながめ、大さわぎになったと聞きます。

この頃先生は、北海道時代のスランプで落選した国画会に「猫」を出品して「入選」、昭和十四年四月には「犬」、「少年」が国画会に入選、国画会奨学賞を受賞し、五月には長男直樹さんの誕生もあって、完全にスランプを乗り越え新しい画境を拓きつつ、絵かきとしてまた意欲が出るのです。「家庭とはこんなに温かく、すばらしいものなのか」孤兒的体験にも似た少年時代、自分はふるさとにとって、そしてこの世にはもう必要のない人間とまで思いつめたこともある画家が、結婚してからは以前とは別の世界を体験し幸福の絶頂期を迎えられるのです。